

□ 「5年」対「20年」

京都大学防災研究所 教授 矢守 克也

1. 「歴史的」とはどういうことか

「今年、100年戦争が始まったと、当時の人たちが思うことはありえないだよ」。昔、歴史の時間にこう教わって、なるほどと思ったことがある。過去の出来事がどのような意味をもつものとして今ここにあるかは、その時点に起きたことだけで決まるのではないということだ。それが「100年戦争」になるかどうかは、それ以降の人びとの生き方が決めるのだから。つまり、過去は完全に過ぎ去り固まってしまったのではなく、今この時点へと引き継がれている。

そう考えると、2011年3月11日、あるいは1995年1月17日から何年経とうが、私たちは、3.11や1.17に対して働きかけることができるし、また、その責任を担っていると言える。しかも、「100年戦争」の例から明らかなように、この主張は、俗に言う「風化」に抗して2つの大震災の記憶を保持していこうといった意味にとどまるものではない。「風化」を食い止めようという姿勢は、大震災という出来事のコアは3.11や1.17にだけあって、それ以降は「よくて原点回帰」という発想の枠内にある。

それに対して、ここでの論点はもっと積極的な前向きなものである。つまり、1.17や3.11の事後を生きる私たち — あの日以降にこの世に生まれた世代も含めて — こそが、1.17や3.11と私たちが呼んでいる出来事の内実を、好むと好まざるとにかかわらず実質的に作り上げてしまっている

ということである。ちょうど、開戦以後の人びとがそれを「100年戦争」にしてしまったのと同じことである。

このことの意味は、反対方向の極端を考えるとより理解しやすいかもしれない。たとえば、「昭和の東南海地震」(1944年)は、戦時下という特殊事情によって、長く、その発生や詳細が意図的に「隠された災害」(たとえば、山下, 2009)であった。事後、人為的に「なかったこと」にされてしまう自然災害すら生じるのである。これを「風化」と呼ぶのは、あまりにも弱い。出来事のコア(「隠された災害」)は、むしろ、事後の歴史的経緯にあったのだから。

このように、本稿が含む特集のサブタイトルにある「歴史的災害」は、一見簡単のように見えて、実は一筋縄ではいかないむずかしい性質を帯びている。ある出来事が、その発生時点で「歴史的な」と形容されるような性質を、それ自体が伴って発生するわけではないからである。見てきたように、その当時は「なかったこと」が事後的に「歴史的災害」として浮上してくる場合もある。逆に、今この社会に生きる者のほぼ全員が「歴史的災害」だと見なしているものが、100年後もそうであるという保証はどこにもない。そして、— むしろ災害の性質によるが — 日本列島周辺で起きる海溝型の巨大地震とそれに伴う巨大津波は、まさに100年、あるいはそれ以上の再来周期をもって私たちをこれまでも襲ってきたのだ。

以上の意味で、大震災の引き金を引いた地震の

発生から約20年が経過した阪神・淡路大震災を思考のための準拠点に据えた場合、私たちは、一方で、それより以前に発生した大災害 — たとえば、関東大震災 — の現況にも目を向けつつ、そうした状況へと至る経路を後追いしている（かもしれない）存在としての阪神・淡路大震災に対して、責任をもって働きかけを継続する必要がある。また他方で、発生から5年を迎えようとしている東日本大震災に近い将来そこへと至る経路を先取りしている（かもしれない）存在としての阪神・淡路大震災に対しても、責任をもって働きかけを継続する必要がある。もちろん、上で述べた必要性は、今、仮に説明のための準拠点とした阪神・淡路大震災だけでなく、東日本大震災をはじめすべての災害について該当する。

2. 語り部活動とデータベース

以上を踏まえて、本稿では、東日本大震災の今後を展望する意味で、あえて発生から5年目、そして10年目の時点から見た20年目の阪神・淡路大震災について考察してみたい。と言うのも、筆者自身、阪神・淡路大震災から5年目、10年目を期して取り組んできたことがいくつかあり、そのいくつかを素材として検証することが、阪神・淡路の20年以降、そして東日本の5年以降を展望することにもつながると思うからだ。

阪神・淡路大震災から約5年が経過した時期に筆者が始めたことが一つある。「語り部グループ1.17」の活動のサポートである。これは、大震災の被災者が結成した震災の語り継ぎのための民間の任意団体である。その約5年後、すなわち、大震災から10年を経た2005年には、この団体は「語り部 KOBE1995」という名の団体へと発展的に継承され現在へと至っている。活動の詳細については、大震災から20年目、つまり、後継団体が活動を開始して10年目にあたる2015年に刊行した冊子「20年後のことは、10年目のことは」を参照され

たい（図1）。

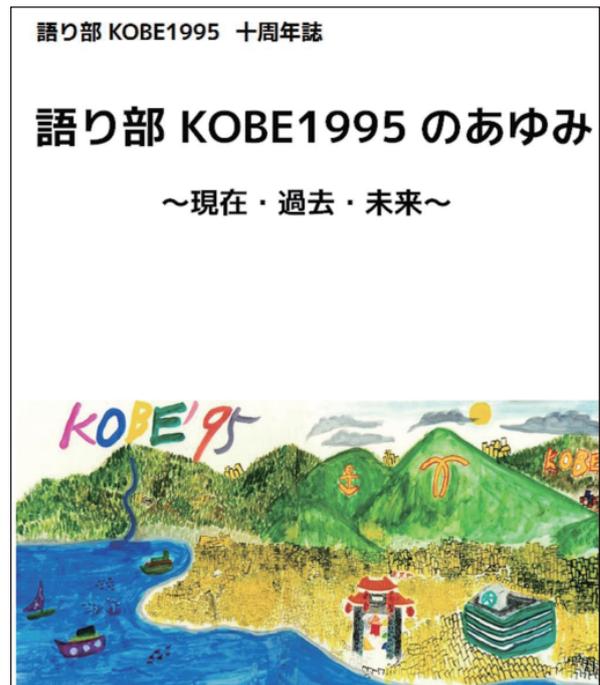


図1 「20年後のことは、10年目のことは」
（「語り部 KOBE1995」の記念冊子）

当時を振り返ってみて印象深く感じる点がある。それは、阪神・淡路大震災と比較して、東日本大震災において、この種の語り継ぎの活動の立ち上がり異常なほど早かったという事実である。「語り部グループ1.17」の発足当初、現在、阪神・淡路大震災に関する組織的な語り継ぎ活動の中核となっている「人と防災未来センター」（神戸市）はまだオープンさえしておらず、同じく語り部活動が実施されている「野島断層保存館」（現「北淡震災記念公園」（淡路島））も開館直後であった。生々しい記憶を心の底や胸の奥に秘めた方々が口を開くには、まだ相当の時間がかかるだろう。そんな空気が支配的であったからこそ、「語り部グループ1.17」や数少ない一部の活動が異彩を放っていたのだ。

それと比較したとき、東日本大震災の被災地では災害の発生後、早い時期から、各地でさまざまな語り部の活動が開始された。また同時に、そうした活動に直接的には参加していない被災者

の「声」も、その相当数をマスメディアや研究機関が中核となった「アーカイブス」の取り組みが網羅的に収集してきた。こうした動向の背景には、20年前と5年前とを隔てる15年の間に、インターネット、ソーシャルメディア、ビッグデータ等のスペックが飛躍的に向上した事実がある。技術的な進歩が、「アーカイブス」の早期立ち上げを容易にしたわけである。

しかし同時に見逃せないのは、ある出来事の歴史的な意味を確定するための社会のデマンドが、急激に強化し、また著しく加速化している事実である。つまり、「それはいったいどのような意味をもつ出来事であったのか」を確定する作業を急がせる社会的圧力が高まっているのだ。この一点に徴するとき、非常に早い立ち上がりを示した東日本大災害の語り部活動に、若干の懸念も覚えずにはおれない。それが、「歴史的災害」として彫琢されていくためには、いささか性急に「デー

タベース」として固定化したかにも見える語り口を、3.11への絶えざる原点回帰を伴いつつ、これからも意識して更新し続ける営みが重要となろう。

3. 「クロスロード」の想定外

大震災から10年が経過した年、つまり2005年に筆者がスタートさせたことがもう一つある。それは、防災学習ゲーム「クロスロード」の取り組みである（詳しくは、矢守・吉川・網代（2005）、矢守・GENERATION TIMES（2014）を参照されたい）。これは、たとえば、「小学校の校庭に仮設住宅を建てるか否か — YES or NO ?」のように、阪神・淡路大震災の被災地で実際に人びとが直面した難問を二者択一形式の設問とし再構成し、集団で議論する防災学習教材である。幸い、その後広く活用いただいている（図2）。

実は、「クロスロード」は、はじめから防災学

クロスロードの概要

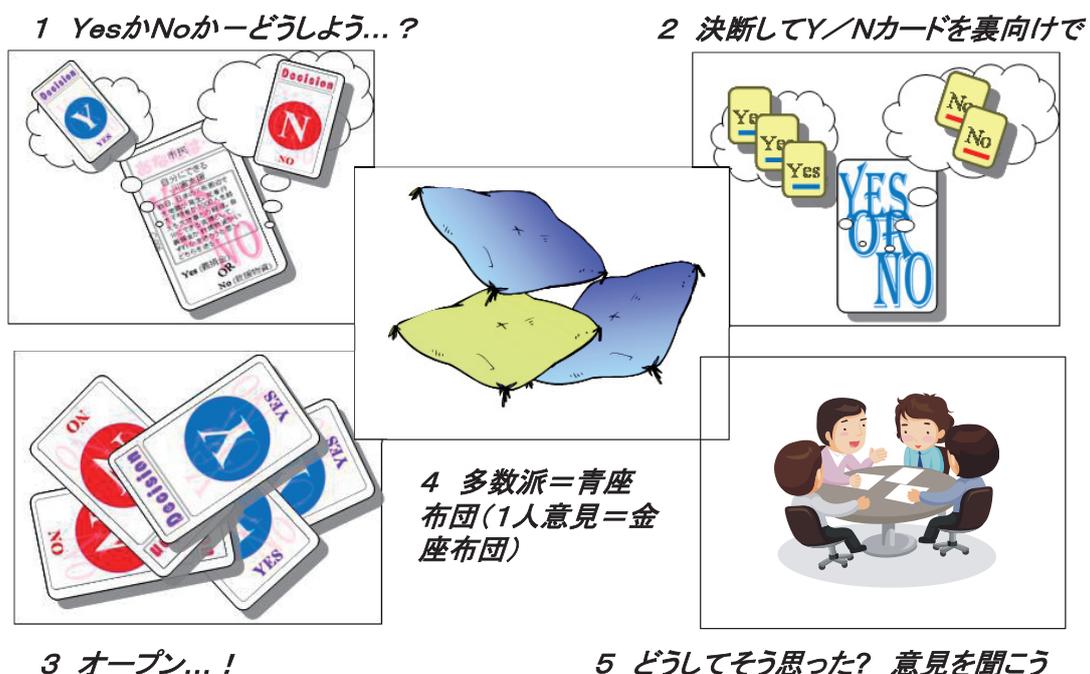


図2 防災ゲーム「クロスロード」

習のためのゲームを制作しようと計画してそうしたわけではなかった。上掲の既刊書にも書いたように、当初は、震災を体験した神戸市職員の方々を対象としたインタビュー・プロジェクト(2003-04年)だけが存在していた。「クロスロード」は、その膨大な記録(語りの記録)からの、言わば「想定外」の産物として生まれたのだった。

制作後も、「思い通りのツールを作ることができた、めでたし、めでたし」。それで完了のはずであった。ところが、そうではなく、もう一つ、うれしい「想定外」が起こる。「クロスロード」をさまざまな場面で教材やワークショップ・ツールとして活用してくださる方々の集まりやネットワークができあがったのだ(「神戸クロスロード研究会」など)。このネットワークは、その後、「クロスロード・ファシリテータの集い」というイベントの中核となり、2014年12月には、神戸をはじめ全国12の会場をインターネット等で結んで「1000人クロスロード」という象徴的な行事も開催された(図3)。

さらに「想定外」は続く。このネットワークは、「クロスロード」というツールをベースに、広い意味での防災教育・学習を展開するためのものだ

と思っていたら、その思い込みもいい意味で破られた。東日本大震災など、実際の災害時にも、このネットワークの人脈を介して被災地支援やアドバイスがなされたりしたのだ。

一例をあげておこう。「クロスロード」のユーザーの一人に、高知県黒潮町の職員Tさんという方がいらっしゃる。東日本大震災発生の数日後、Tさんは、宮城県気仙沼市で支援活動にあっていた。黒潮町と気仙沼市の間に、カツオ漁を通じたつながりがあったためでもあるが、両者を隔てる距離は千キロにも及ぶ。Tさんも、当初、躊躇したそう。そのTさんの背中を押したのが、「クロスロード」を通じて知り合い交流があったHさん(元神戸市職員)の言葉——「応援に行っただけ」——であったという。Hさんは、阪神・淡路大震災の発生当時、神戸市が他自治体の職員に助けられた経験を踏まえて、この言葉をTさんに伝えたという。

そして、はからずも、今度は、黒潮町が全国的にクローズアップされる事態が生じている。黒潮町が、南海トラフの巨大地震による津波の波高想定に関して、全国最悪の自治体(34メートル)となったのである。Hさん、筆者はもちろん、「ク



図3 「1000人クロスロード」の一場面(2014年12月、神戸市にて)

ロスロード」を通じてできあがったネットワークに連なる多くの人びと、そして、東日本大震災で黒潮町との結びつきをさらに深めた気仙沼市の人びとも、万一の場合は黒潮町に駆けつけてくれることだろう。ささやかではあるが、「クロスロード」が、阪神・淡路大震災～東日本大震災～（将来生じてしまうであろう）南海トラフの巨大地震、これら3つの出来事とそれらに関わる人びとを結びつける媒体となったのである。

この経験から、つまり、ゲーム本体の公表以降「クロスロード」が、うれしい「想定外」を次々に誘発してくれた経験から筆者が感じることも、再び、事後の重要性である。阪神・淡路であれ、東日本であれ、それらは、たしかにそれ自体

として大きな出来事である。しかし、それがいかなる意味において大きな出来事であるのか、どのような形で「歴史的災害」となるかは、事後を生きる私たちに — 少なくとも、相当程度 — 委ねられているのである。

引用文献

- 山下文男（2009）隠された大震災 — 太平洋戦争史秘録 東北大学出版会
- 矢守克也・GENERATION TIMES（2014）被災地 DAYS：時代 QUEST — 災害編 — 弘文堂
- 矢守克也・吉川肇子・網代 剛（2005）ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション：「クロスロード」への招待 ナカニシヤ出版